にも目を附け騒ぎたり。上渡らせ給ひて御覽ず。若宮おはしませば撒米し喧騒る氣はひす。紫遠の童女に青き白橡の汗衫を著せたり。をかしと思ひたるに、藤宰相の童女には赤色の汗衫をきせ、下仕の唐衣に、青色を著せたる程、押し反へ妬たげなり。宰相中將のも五重の汗衫、尾張は葡萄染を三重にてぞ著せたる。袴皆濃き薄き、心心なり。侍從宰相の五節の局宮の御前唯だ見渡すばかりなり。立蔀の上より簾の端も見ゆ。人の物云ふ聲も仄かに聞ゆ。彼の弘徽殿の女御の御方の女房なん傳女にてあると云ふ事を、ほの聞きて、哀れ昔慣らしけん戸數を物の蔭に居隱れて見るらん程も哀れに、いざいと知らぬ顏なるは惡ろし、言一つ云ひ遣らんなど定めて、今宵傳女何方なりしぞ。其れなど宰相中將のたまふ。源少將も同じ事語り給ふ。猶清げなりかしなどあれば、御前の扇多く候ふ中に蓬萊作りたるを箱の蓋に置げて、日蔭葛を廻りて圓め置きて、其中に螺鈿したる櫛どもを入れて、白い物など然べい樣に入れなして、公ざまに顏知らぬ人して、中納言の君の御局より、左京の君の御前にと云はせて差し置かせつれば、彼れ取り入れよなど云ふは、かの我が女御殿より賜へるなりと思ふなりけり。また然思はせんと計畫りたる事なれば、案には計られにけり。黨物を立文にして上に書きたり。

多かりし豐の宮人さし分けてしるき日かげをあはれとぞ見し

かの局にはいみじう耻ぢけり。宰相も唯だなるよりは心苦しう思しけり。小忌の夜は宰相の五節に童女の汗衫、大人の傳女に、皆青摺をして赤紐をなん爲たりけると云ふ事を、後に齋院に聞し召し、をかしうと思召して、召したりければ、御覽じて、げにいと今めかしう思召して、青き紙の端に書きて、袂に結び附けて返させ給へり。

神代より摺れる衣と云ひながらまた重ねてもめづらしきかな

斯くて臨時の祭になりぬ。使には此殿の權中將出で給ふ。其日は內の御物忌なれば、殿も上達部も、舞人の君達も、皆夜居に籠り給ひて、內わたり今めかしげなる所所なり。殿の上もおはしませば、御乳母の命婦も、をかしき御遊に目も附かで、使の君を偏に凝視り奉りたり。斯くて此臨時の祭の日、藤宰相の御隨身、有りし筥の蓋を此君の隨身に差し取らせて去にけり。有りし筥の蓋に、銀の草子筥を据ゑたり。鏡入れて、沉の櫛、錄の笄を入れて、使の君の髻搔き給ふべき具と思しくて爲たり。此筥の中に泥にて畫手を描きたるは、有りし返しなるべし。

日かげ草かがやくほどや紛ひけんますみの鏡くもらぬものを

師走にもなりぬれば、月日の數も殘り少なき哀れなり。花、蝶と云ひつる程に年も暮れぬ。斯くて若宮の、いと物鮮やかにめでたう、山の端より射し出でたる望月などのやうにおはしますを、帥殿の邊りには胸つぶれ、いみじう覺え給ひて、人知れぬ年頃の御心の中の豫期事どもも、むげに違ひぬる樣に思されて、猶此世には人笑はれにて止みぬべき身にこそ有めれ、あさましうもあるかな、珍らかなる夢など見てし後は、然りともと賴もしう、異なる事無き人の例の果て見ではなどこそは云ふなれば、然りともとのみ其儘に精進潔齋を

爲つつ在り過ぎし。ひたみちに佛神を頼み奉りてこそ在りつれ、今は斯うにこそ有めれと、御心の中の物哀きに思されて、空頼にてのみ世を過ぐさんは、いと迂愚がましき事など出で來て、いとど生ける甲斐無き有樣にこそ有べかめれ、如何がすべきなど、御叔父の明順、道順など打語らひ給へば、げに世の有樣は然のみこそおはしますめれ、然りとて又如何がはせさせ給はんとする。唯だ御命だに平安にておはしまさばとこそは頼み聞えさすれなど、哀れなる事どもを打泣きつつ聞えさすれば、殿も、斯くてつくづくと罪をのみ作り積むも、いとあぢきなくこそ有べけれ、物の因果知らぬ身にもあらぬものから、何事を待つにかあらんと思ふに、いとはかなしや。猶今は出家して、暫し行ひて、後の世の頼みをだにやと思ふに、ひたみちに起した る道心にもあらずなどして、山林に居て經を讀み行をすとも、此世の事どもを思ひ忘るべきやうも無し。然て萬づに攀緣しつつせん念誦讀經は甲斐は有らんとすらんやはと思ふに、またえ思ひ立たぬなりなど云ひ續けさせ給ふ。いみじう哀れなる事なりかし。中納言、僧都の君なども世を同じう思しながら、あさはかに、なかなか心安げに見え給ふ。此殿ぞ萬づに世と共に思し亂れたる。世の憂さなめればいとど心苦しうなん。斯かる程に年復りぬ。寛弘六年になりぬ。世の有樣常のやうなり。若宮いみじう美くしう生ひ出でさせ給ふを、上、宮の御中に率て遊ばせ奉らせ給ひては、帝の宣はする。猶思へど、内に昔稚き子どもを在らせずして、宮達の斯く愛くしうなどあらんを、五歳七歳などにて御對面とて喧騒りけんこそ、今の世に萬づの事の中にいと堪へ難かりける事にありけれ。斯う見ても見ても飽かぬものを、思ひ遣りつつ明け暮さんは戀しかべい事なりや。此一の宮をこそいと久しう見ざりしか。有樣を人傳てに聞きて怪しからぬまでゆかしかりし事など、打語らひ聞えさせ給ふも、いとめでたし。斯かる程に正月も暮れぬ。宮、其儘に此月頃せさせ給ふこと無かりしに、十二月二十日の程にぞ唯だしるしばかり御覽したりける儘に、今年斯う今までせさせ給はねば、猶彼折の御名殘にやと思しも寄らぬに、去年の此頃の御心地ぞせさせ給ひける。如何なりけるにかと思召す程に、侍ふ人人も、又事のおはしますべきにこそと私語き聞えさすれば、一方は、何時の程にか然おはしまさんと云ふ者あり。又或るは、然樣のものぞ、又さし續き同じ樣にて出で給へる事は然こそはあれ。有り有りて如何にめでたからんなど甲し思へり。殿も上も皆聞し召して、氣色だち思召したり。斯く云ふ程に三月にもなりぬれは、眞に然樣の御氣色に成りはてさせ給ひぬ。殿の御有樣えも云はぬ樣なり。斯く云ふ程に、自ら世にも漏り聞えぬ。年頃の女御達唯だなるよりは物恥かしう思し知るべし。右の大臣、内の大臣、此は斯かるべき事かは、我等も同じ筋にはあらずや、斯う事の外なる恥かしき宿世なりと思さるべし。三月晦日に出でさせ給ひなんとあれど、帝いと有るまじき御事に聞えさせ給へば、暫しは過ぐさせ給ふ。斯かる程に、殿の三位殿、左衞門督に成らせ給ひにけり。中宮の御祈りは猶里にてと思し急がせ給ひて、四月十餘日の程に出でさせ給ふ。内には如何に覺束なう、此度は若宮の御戀しささへ添ひて、悒せく思し亂れさせ給ふ。さて京極殿に出でさせ給へれば、尙侍の殿、若宮をいつしかと待ち迎へ見奉らせ給ふ。其後御乳母達は唯だ御乳參る程ばかりにて、唯だ尙侍の殿抱き愛くしみ奉らせ給へば、御乳母達もいと嬉しき事に思ひ聞えさせ

たり。中宮の御祈りども前の如し。萬づ爲殘さや給ふ事無し。何れの節かはと思し出づる御有樣なりしかば、前前の僧ども同じ樣の御祈りに掟てさせ給へば、其儀に違はぬ事どもを仕うまつる。此度は男女の御有樣あながちなるまじけれど、猶差並ばせ給はん程の威さはこよなかるべければ、同じ樣を思し志すべし。彼花山院の四の御方は、院亡せさせ給ひにしかば鷹司殿に渡り給ひにければ、殿聞し召して、彼れをもがなとは思召しけれど、思しも立たぬ程に殿の上ぞ常に音なひ聞えさせ給ひけれども、如何なるべい事にか思し立ち離かりけり。斯かる程に、殿の左衞門督を然べき人人いみじう氣色だち聞え給ふ所所あれども、まだとも斯うも思召し定めぬ程に、六條の中務の宮と聞えさするは故村上の先帝の御七の宮におはします。麗景殿の女御の御腹の宮なり。北の方はやがて村上の四の宮、爲平の式部卿の宮の御中姫君なり。母上は故源帥の大臣の御女の腹なり。斯かる御中より出で給へる女宮三所、男宮二所ぞおはします。其姫宮えならずかしづき聞えさせ給ふ。聊か不備なる事も無く、物清き御中らひなり。中務の宮の御心用ひなど世の常に尋常におはしまさず。いみじう御才學うおはする餘りに、陰陽道も醫師の方も、萬づにあさましきまで足らはせ給へり。管文和歌などの方世に勝れめでたうおはします。心にくく耻かしき事限無くおはします。其宮、此左衞門督殿を志し聞えさせ給へば、大殿聞し召して、いとかたじけなき事なりと畏まり聞えさせ給ひて、男は妻がらなり、いとやんごとなき邊りに參りぬべきなめりと聞え給ふ程に、内内に思し設けたりければ今日明日になりぬ。然るは内などに思し志し給へる御事なれど、御宿世にや、思し立ちて壻取り奉らせ給ふ。御有樣いと今めかし。女房二十人、童女、下仕四人づつ萬づいといみじう、奥深く心にくき御有樣なり。今の世に見え聞ゆる香にはあらで、げに是れをや古の薰衣香など云ひて世にめでたき物に云ひけんは此薰りにやとまで、押し反し珍らしう思さる。姫宮御年十五六ばかりの程にて、御髮など尙侍の殿の御有樣にいと善う似させ給へる心地せさせ給ふに、めでたき御容と推し測り聞えさせ給ふべし。中務の宮いみじう御氣色疎かならず、哀れに見えさせ給ふ。斯くて日頃ありて、御所露顯なれば、御供に參るべき人人、皆殿の御前撰り定めさせ給へり。其夜の有樣聊か心もとなき事無く爲盡させ給へり。男君の御志の程、有樣のめでたさ、御品程に由るわざにもあらずのみこそは有めれ。されど此御中らひいとめでたし。宮いと甲斐ありて思し見奉らせ給ふ。六條に明暮の御歩りきも、路の程などに夜行の夜なども自ら有り會ふらん。いと臙心めたき事なりと思して、上つ方に然べき御樣にと掟て聞えさせ給ふ。中務の宮今は心安くなりぬるを、今だに如何で本意遂げなんと思し成らせ給ふ。事に觸れて、やんごとなき御有樣をだに、然べき折節、珍らしき節會などには、いと出だし奉らまほしうのみ公に思召さるる事、此度のみにあらねど、すべて然樣に思し損けさせ給はず、世に口惜しき事になん。斯くて尙侍の殿、春宮に參らせ給はん事もいと近うなりて、急ぎ立たせ給ひたり。斯く參り給ふべしとある事を、宣耀殿には有べい事の今まで斯かる事を思召せば、とも斯くも思しのたまはせぬに、いと怪しうも思し入れぬかなと、侍ふ人人聞えさすれど、今は唯だ宮達の御扱ひをし、其隙には行をとこそ思へ、宮の御爲めにいとほしき事にこそあれ、然樣ならん事こそ好かべかめれなど、いと疎かに猶思ひ忍び給

へど、其れに障らせ給ふべき事にもあらぬものから、唯だ卑しき人だに如何がは物は云ふと、有り難う見えさせ給ふ。斯くて中宮の御事の斯くおはしませば、靜心無く殿の御前思召す程に、はかなく秋にもなりぬ。二月より然おはしませば、十一月にはと思召したれば、いと物騷がしうて、尙侍の殿の御參り多になりぬべう思召しけり。斯かる程に、帥殿の遽りより若宮をうたて申し思ひ給へる樣の事、此頃出で來て、いと聞きにくき事多かるべし。眞にしも有らざらめど、其れにつけても怪しからぬ事ども出で來て、帥殿いとど世の中漫ろはしう思し歎きけり。明順が知る事なりなど、大殿にも召して仰せられて、斯く有るまじき心な持たりそ、斯く稚うおはしますとも、然べうて生れ給へらば四天王守り奉り給ふらん、唯だの童だに人の惡しうするには專ら死なぬわざなり、況んや朧ろげの御果報にてこそ人の云ひ思はん事に由らせ給はめ、眞人達は斯くては天の責を蒙りなん、我がとも斯くも云ふべき事ならず、とばかり御前に召してのたまはせたるに、いといみじう怖ろしう辱しと畏まりて、とも斯くもえ述べ申さで退かり出でにけり。其後やがて心地惡しうなりて、五六日ばかりありて死にけり。是れに附けても、帥殿世を愼ましきものに思し增さる。同じ死と云へども、明順も、折心憂くなりぬる事を、世の人口安からず云ひ思ひけるに、帥殿、如何にか世を在りにくく憂きものになん思し亂れければにや、御心地例にもあらずのみ思されて、御藥なども參らぬにはあらで、なかなか常よりも物を急がしう參りなどせさせ給ひけるに、例ならぬ御有樣を上も殿も怖ろしき事に思し歎きけり。此年頃御歩りき無かりつる程に、古今、後撰、拾遺などをぞ皆設け給へりける。其れに附けても猶人より顯に殊に御才の限り無ければなりけり。斯かる程に、中宮の御事、御修法、御讀經、萬づの御祈り、はかなき事ども、前の例を思し掟てさせ給ふに、十一月廿五日の程に御氣色ありて惱ましげに思召したり。例の聞きにくきまで鳴り滿ちたり。されど御物の怪などおとなし。其方の心のとがにおはしますも、限無き御祈りの驗なるべし。いみじく平安に程無く御子生れ給ひぬ。萬づよりも又後の御事とののしらせ給ふも、程無くて物せさせ給ひつ。いとめでたき事と思召し喜びたるに、前に劣らぬ男御子生れさせ給へるものか。殿の御前を初め奉り、いと斯かる事は餘りあさましう、空言かとまでぞ思召されける。內にも聞し召して、いつしかと御釵あり。すべて何事も唯だ初めの例を一つ違へず引かせ給ふ。女房の白衣など此度は多にて、浮紋、堅紋、織物、唐綾など、すべて云はん方無し。此度は袴をさへ白うしたれば、斯くも有りぬべかりけりと、白妙の鶴の毛衣めでたう、千年の程推し測られたり。御湯殿の有樣など初めのにて知りぬべければ書き續けず。御書の博士も同じ人參りたり。すべて世にいみじうめでたき御有樣に、申し遣らん方無し。三日、五日、七日の夜などの御作法、なかなか勝樣にこそ見ゆれ。此度は事慣れぬと、事略かせ給ふ事無し。帥殿は日頃水がちに、御臺なども如何なる事にかとまで聞し召せど、怪しう在りし人にもあらず細り給ひにけり。御心地もいと苦しう惱ましう思さる。打延へ御齋にて過ぐさせ給ひし時は、いみじうこそ肥り給へりしか。今は例の人の有樣にて過ぐさせ給へど、斯かる御事を如何なる事にかと、心細しと思さるるままに、松君の少將何事にも人より勝りて思さるるも、如何がはならんとすらんと哀れに心苦しう思し歎くも道理にいみじう、あらぬ世

を哀れにのみ思さるるも、げにとのみ見え聞ゆ。内には若宮の御戀しさも、今宮の御ゆかしさも、猶疾く入らせ給へとのみ聞えさせ給ふ。内も燒けにしかば帝は今内裏におはします。東宮は枇杷殿におはします。十二月になりぬれば尙侍の殿の御參りなり。日頃思し志しつる事なれば、朧ろげならで參らせ給ふ。いとあさましうなりぬる世にこそ有めれ。年頃の人の妻子なども皆參り集まりて大人四十人、童女六人、下仕四人。尙侍の殿の御有樣聞え續くるも例の事めきて同じ事なれども、又如何がは少しにてもほの聞えさせぬやうは有らんな。御年十六にぞおはしましける。此御前達、何れも御髮めでたくおはします中にも、此御前優れ、いと煩たきまでにおはしますめり。東宮、いと甲斐有りて、いみじうもてなし聞えさせ給へり。内邊り、いとど今めかしさ添ひぬべし。はかなき御具どもも、中宮の參らせ給ひし折こそ耀く藤壺と世の人申しけれ。この御參り形容ぶべき方無し。其折よりこなた十年ばかりになりぬれば幾多の事ども變りたる、何程推し測るべし。斯くて參らせ給へれば、春宮むげに長び果てさせ給へれば、いと恥かしうも、やんがとなくも、樣樣御心遣ひ疎かならず。年頃宣耀殿を又無きものに思し見奉らせ給ひつるに、あさましうこよなき程の御齟齬なれば、唯だ我が御姫宮達をかしづき据ゑ奉らせ給へらんやうにぞ思されける。日頃にならせ給ふままに、やうやう慣れおはします御氣色も、いとどえも云はず美くしう思ひ聞えさせ給ふ。夜毎の御宿直はた更にも云はず、今は唯だ此御方にのみおはします。御具どもを片端より開け擴げて、御目留めて御覽じ亘すに、是れは是れと見所あり、めでたう御覽ぜらる。御櫛の箱の内のしつらひ、小箱どもの入り物どもは更なり、殿の上、君達などの、我も我もと挑み爲給へるどもなれば、いみじう興ありて御覽ず。中宮の御參りも斯樣にこそは思し掟てさせ給ふめりしか。宣耀殿に、故村上の先帝の彼昔の宣耀殿の女御に爲奉らせ給へりけるには、卷繪の御櫛の箱一雙は傳はりて、今の宣耀殿の女御の御方にぞ候ふを、其中をいみじう御覽じ興ぜさせ給ひしを、是れに御覽じ合はするに、彼れは事の外に古代なりけり。然るは村上の先帝の樣樣の御心掟て、此世の帝の御心よりも勝れさせ給へりけるも、我が御口、筆して仰せ給ひて、造物所の物ども御覽じては直し爲させ給へるを、是れは猶いとこよなう御覽ぜらるるに、時世に從ふ目移りにやと御心ながら思召せど、猶是れはいとめでたければ、殿の御心ざま、あさましきまで何事にも如何で斯くとぞ思召しける。其の御具どもの屏風どもは爲氏、經則などが書きて、道風こそは色紙は書きたれ。いみじうめでたしかし。そのかみの物なれど只今のやうに麗ばまず、鮮やかに用ひさせ給へりしに、是れは弘高が書きたる屏風どもに、侍從中納言の書き給へるにこそは有めれ。いづこは是れに劣り勝りの有るべきなど、御心の中に思召し餘りては、殿や左衞門督などの參り給へると、宣ひ定めさせ給へるに附けても、御年など長びさせ給ひにたれば、何事も見知り、物の槪おはしますにこそ、いと恥かしう、いとど何事に附けても、御用意心殊なり。許多の女房えも云はぬ姿裝束にて、えならぬ織物の唐衣を著、おどろおどろしき大海の摺裳ども引きかけ渡して、扇どもを挿し隱し、打群れ打群れ居ては、何事にかあらん打ち云ひつつ私語き笑ふも、恥かしきまでに思ほされて、此御方に渡らせ給ふ折は、心化粧させ給ひけり。はかなう奉りたる御衣の匂ひ薰りなども、宣耀殿よ

りめでたう爲立てて奉らせ給ひけり。帝、春宮と申すは、若く稚くおはしますだに心殊にいみじきものに人思ひ聞えさするに、況いて此御前は御年も大人びさせ給ひ、御有樣なども尋常ならず、いとをかしう禮禮しうおはしませば、いと恥かしげなる事なん多くおはしますに、尙侍の殿も他御方方よりも、はかなく奉りたる御衣の袖口、重なりなどの、いみじくめでたうおはしませば、殿の御前もいとどめでたうのみ重ね聞えさせ給ふめり。宣耀殿には、外人も、近きも、如何に思召すらん、安くは大殿籠るらんやなど聞ゆれば、年頃斯かるべい事の斯からざりつれば、宮の御爲めにいと心苦しく見奉れば、今なん心安く見奉るなどのたまはせて、御裝束を明暮めでたう爲立てさせ給ひ、御薰香など常に合せつつ奉らせ給ひける。宮は唯だ母后などのやうに思ひ聞えさせ給へるも、げにとのみ見えさせ給ふ。殿の上は中宮と此女御殿とを覺束なからず渡り參らせ給ふ程も、いと有らまほしうなん。年も復りぬ。寛弘七年とぞ云ふめる。萬つ例の有樣にて過ぎもて行くに、帥殿は今年となりてはいとど御心地重りて、今日や今日やと見えさせ給ふ。何事も月頃爲盡させ給へれば、今は如何がすべきと思し歎き、然るは昨年よりは御封なども例の大臣の定めに得させ給へど、國國の守も、はかばかしく、すがやかに奉らばこそあらめ、いといとほしげなり。御心地いみじうならせ給へば、此姫君二所、藏人の少將とを並め據えて、北の方に聞え給ふ。已れ亡くなりなば、如何なる御ふるまひどもをか爲給はんずらん。世の中に侍りつる限りは、と有りとも斯かりとも、女御、后と見奉らぬやうは有るべきにあらずと思ひとりてかしづき奉りつるに、命堪へずなりぬれば、如何が爲給はんとする。今の世の事とて、いみじき帝の御女や太政大臣の女と云へど、皆宮仕に出で立ちぬめり。此君達を如何にをかしと思ふ人多からんとすらんな。其れは唯だ他事ならず、己が爲めの末の世の耻ならんと思ひて、男にまれ、何の宮彼の御方よりとて、言も好う語らひ寄せては、故殿の何とありしかば斯かるぞかしと、心を遣ひしかばなどこそは世にも云ひ思はめ。母とておはする人はた此君達の有樣を、はかばかしう後見もてなし給ふべきにあらず。何ぞて世に在りつる折、神佛にも己が在る折、先に立て給へと祈り請はざりつらんと思ふが悔しき事。然りとて尼になし奉らんとすれば、人聞き物狂ほしきものから、怪しの法師の具どもに成り給はんずかし。哀れに悲しきわざかな。殿が死なん後、人笑はれに人の思ふばかりの振舞有樣捉て給はば、必ず恨み聞えんとす。ゆめゆめ殿が亡からん世の面伏せ、殿を人に云ひ笑はせ給ふなよ、など泣く泣く申し給へば、大姫君、小姫君、涙を流し給ふも疎かなり。唯だ惘れておはす。北の方も答へ給はん方も無く、唯だよよと泣き給ふ。松君の少將などを取り分きいみじきものに云ひ思ひしかど、位も斯ばかりなるを見置きて死ぬる事、我れに後れては如何がせんとする。魂あれば然りともとは思へども、如何にせんとすらんな。いでや、世に在り煩ひ、司位人よりは短し、人と等しくならんなど思ひて、世に從ひ、物覺えぬ追從を爲し、名簿打爲などせば、世に片時在り廻らせじとす。其定めならば唯だ出家して山林に入りぬべきぞ、など泣く泣く云ひ續け給ふを、いみじう悲しと思ひ惑ひ給ふ。げに道理に、悲しとも疎かなり。中納言殿哀れに聞き惑ひ給ひて、何か斯くは思し續くる。げに皆然る事どもには侍れど、何どてか、いと事の外には誰も思はせんなど、いみじう泣き給

へば、君をこそは年頃子の樣に思ひ聞え侍りつれど、斯く我も人もはかばかしからで已みぬる事の哀れに口惜しき事。道雅を猶能く云ひ敎へ給へなど、萬づに云ひ續け泣き給ふ。一品の宮、一の宮も、此御心地を如何に如何にと思し歎く程に、正月二十日餘りになれば、世には司召とて馬車の音も繁く、殿ばらの內に參り給ふなども聞ゆれば、哀れにいみじ。大姫君は只今十七八ばかりにて、御髮濃やかに、いみじう美くしげにて、長に四五寸ばかり餘り給へり。御容有樣、愛敬づき、氣近う臈たげに、色合などいみじう美くしうて、白き御衣どもの上に、紅梅の堅紋の織物を著給ひて、濃き袴を著給へる、哀れにいみじう美くしげなり。中姫君十五六ばかりにて、大姫君よりは少し大きやかにて、いと宿德にものものしう、あな淸げの人やと見え給ひて、御髮は長に三寸ばかり足らぬ程にて、いみじう總やかに頼もしげに見えたり。色色の御衣のなよよかに皆重なりたる、朔日の御裝束どもの萎えたる程と見えたり。いみじう哀れに美くしげなる御容どもに、母北の方小やかに寧大なる樣にて、只今三十餘りばかりにぞ見え給ふ。其れも又いと淸げにておはす。藏人の少將いと色合美くしう、顏つき淸けに、有べき限り、繪に書きたる男の樣して、香に羅の靑き裏ねたる狩襖に、濃紫の堅紋の指貫著て、紅の打衣などぞ著給へる、色合何と無く匂ひ給へるに、況していたう泣き給へれば面赤み給へり。帥殿も容、身の才、世の上達部に餘り給へりとまで云はれ給ひつるが、年頃の御物思ひに、肥り煩たうおはしましつるを、此月頃惱み給ひて、やや打細り給へるが、色合などの更に變り給はぬをぞ、人人怖ろしき事に聞ゆる。此姫君達のおはすれば、かたじけなかりて、御烏帽子引き入れて臥し給へり。若やかなる女房四五人ばかり、薄色の裙ども、かことばかり引き結ひつけたり。何事も濕り哀れにをかし。遂に正月廿九日に亡せ給ひぬ。御年三十七にぞおはしける。此姫君達、少將など、然りともと思しけるに、あさましう物も覺え給はず。唯だ後れじ後れじと泣き惑ひ給へど、甲斐ある事ならばこそあらめ、いといみじう哀れとも疎かなり。只今いと斯くしもおはしますまじき程に、斯くはかなき樣になり給ひぬれば、年頃然りともの御賴みに、萬づ心長閑かに思しわたりけるを、中宮の若宮、今宮、差し續きて月日の如くにて光り出で給へるに、すべて條理無う、今は斯うにこそと思しつるに、御病も附き、御命も縮めてけるにや。此殿の君達は更なり、中納言や賴親の內藏頭、周賴の中將大輔など云ふは、此御兄弟ども、哀れに思ひ歎き給へり。一品の宮、一の宮などの御氣色も疎かなるべきにもあらず、思ひ遣るべし。哀れにいみじき世の中なり。いとど云ふ甲斐無くてはなどぞ人も聞えける。中納言いとど世の中を憂きものに思したるに附けても、僧都の君と打語らひ給ひつつ、猶世を捨てまほしうのみ思し語らひ聞え給ふ。憂き世の中に今は唯だ自らの事になりぬる心地のみすれば、如何にせましと思すに、卿資が女の腹の女君達の哀れさに、萬づをえ捨て給はぬ、哀れなり。小一條の中の君と聞ゆるは、宣耀殿の御弟の君、殿も上もとも斯うも爲さで亡せ給ひにしかば、如何で女御殿に劣らぬ樣の事をなど思し構へて、春宮の御弟の帥の宮に聞え附け給へりしかば、南院に迎へ給へりしかど、年月に添へて御志淺うなりもて行きて、和泉守道貞が妻を思し騷ぎて、此君をば事の外に思したりしかば、居わづらひて、小一條の祖母北の方の御許に歸り給ひにしぞかし。然れば春宮も宣耀殿も、

此事を我が口入れたらましかば如何に聞きにくからまし、知らぬ事なれば心安しとぞ思しのたまはせける。御幸ひ同じ御兄弟と見え給はず。和泉をば故彈正の宮もいみじきものに思したりしかば、斯く帥の宮もうけばり思すなりけり。故關白殿の三の君、帥の宮の上も、一條邊りに心得ぬ御樣にてぞおはする。又小一條の中の君も如何がとぞ人推し測り聞ゆめる。斯かる程に、六條の宮も亡せ給ひにしかば、左衞門督殿ぞ萬づ思し扱ひ聞え給ふも本意あり。哀れなる御事なり。まこと花山院崩れさせ給ひにしかば、一條殿の四の君は臘司殿に渡り給ひにしを、殿の上の御消息度度ありて、迎へ奉り給ひて、姫君の御具に成し聞え給ひにしかば、殿萬づに掟て聞え給ひし程に、御志いと忠實に思ひ聞え給ふ。家司なども皆定め、眞しうもてなし聞え給へば、いと有べい樣に有るべかしうて過くさせ給ふめれば、院の御時こそ御兄弟達も知り聞え給はざりしか、此度はいとめでたくもてなし聞え給へりけり。中宮の若宮、いみじういと愛くしうて走り歩りかせ給ふ。今年は三歳に成らせ給ふ。四月には、殿、一條の御棧敷にて若宮の物御覽ぜさせ給ふ。いみじう肥らかに、白う愛敬づき、美くしうおはしますを、齋院の渡らせ給ふ折、大殿、是れは如何がとて、若宮を抱き奉り給ひて、御簾を褰げさせ給へれば、齋院の御輿の帷布より御扇を差し出でさせ給へるは、見奉らせ給ふなるべし。斯くて暮れぬれば、又の日齋院より、

光り出づる葵のかげを見てしかば年經にけるも嬉しかりけり

御返し、殿の御前、

もろかづら二葉ながらも君に斯くあふひや神のしるしなるらん

とぞ聞えさせ給ひける。若宮、今宮、打續き走り歩りかせ給ふも、朧ろげの御功德の御身と見えさせ給ふ。中宮を殿はいみじうやんごとなきものに思ひ聞えさせ給へるも道理にこそ。斯くて東宮の一の宮をば式部卿の宮とぞ聞えさすなるを、廣幡の中納言は今は右の大臣ぞかし。承香殿の女御の御弟の中姫君に此宮壻取り奉り給へり。いでや古代にこそなど思ひ聞えさせ給ふに、其れ然しもあらず、いと目安き程の御有樣なり。殿も殊に若くより覺えこそおはせざりしかど、めでたうのしり給ひし閑院の大將は大納言にてこそは亡せ給ひにしか。此殿は斯く命長くて、大臣まで成り給へればいとめでたし。式部卿の宮、然ばかりにやと思ひ聞え給ひしかども、いと思ひの外に女君も清げに善うおはし、御心樣なども有らまほしう、何事も目安くおはしましければ、御中らひの志、いと甲斐ある樣なれば、只今は、女御の又無きものに思ひ聞えさせ給ひし父大臣、此宮の上をいみじきものに思ひ聞え給へり。宮もいみじう御心の本性思れ給ひけれど、此女君を只今はいみじう思ひ聞え給へれば、いと思はずなる事にぞ人人聞えける。彼帥殿の大姫君には、只今の大殿の高松殿腹の三位中將通ひ聞え給ふとぞ云ふと、世に聞えたり。惡しからぬ事なれど、殿の思し掟てしには違ひたり。中將いみじう色めかしうて、萬づの人唯だに過ぐし給はずなどして、御方方の女房に物のたまひ、子をさへ生ませ給ひけるに、此御邊りにおはし初めて後は、こよなき御心落ち居たれど、猶折折の物の紛れぞいと心づき無うおはしける。哀れに志の有るままに、萬づに扱ひ聞え給へば、仕うまつる人も打泣き、女

君も恥かしきまで思しけり。母北の方もとより中の君をぞいみじく思ひ聞え給へりければ、萬づに此御爲めには疎かなる樣に見え給ひける。中の君をば中宮よりぞ度度御消息聞え給へど、昔の御遺言の片端より破れんがいみじさに、只今思しも掛けざめれど、目安き程の御振舞ならば然樣にやと、心苦しうぞ見え給ひける。哀れなる世の中は寢るが中の夢に劣らぬ樣なり。あさましき事は、帥の宮の思ひも掛けざりつる程に、はかなう煩はせ給ひて亡せ給ひにしこそ、猶猶哀れにいみじけれ。内の一の宮御元服せさせ給ひて、式部卿にと思せど、其れは東宮の一の宮さておはします。中務にても二の宮おはすれば、只今空きたるままに、今上の一の宮をば帥の宮とぞ聞えける。御才深う心深くおはしますに附けても、上は哀れに、人知れぬ私物に思ひ聞えさせ給ひて、萬づに飽かず、哀れなるわざかな、斯くやは思ひしとのみぞ打守り聞えさせ給へる。御志のあるままにとて、一品にぞ成し奉らせ給ひける。萬づを次第のままに思召しながら、はかばかしき御後見も無ければ、其方にもむげに思し斷えはてぬるに附けても、返す返す口惜しき御宿世にもありけるかなとのみぞ悲しう思召しける。中宮は御氣色を見奉らせ給ひて、とも斯くも世におはしまさん折は、猶如何でか此宮の御事を然も有らせ奉らばやとのみぞ、心苦しう思召しける。此頃となりては、如何で如何で疾く降りなばやと思し宣はすれば、中宮物を心細う思ほしたり。されど美くしく差し續かせ給へる御有樣をぞ、頼もしうめでたき事に世の人申しける。

岩蔭

斯くて、帝、如何で降りさせ給ひなんとのみ思し宣はすれど、殿の御前許し聞えさせ給はぬ程に、例ならず惱ましうおはしまして、如何なる事にかと思して、御慎みあり。中宮も靜心無く歎かせ給ふ程に、眞實やかに苦しう思召さるれば、是れより重らせ給ふやうもこそあれと、何事も思し分かるる程に、如何でとも斯くもと思召さる。御物の怪など樣樣繁き樣なり。此頃一條の院にぞおはします。夏の事なれば、然らぬ人だに安くもあらぬに、いみじう苦しげにおはしますも、見奉り仕うまつる人、安くもあらず思ひ歎く。六月七八九日の程なり。今は斯くて降り居なんと思すを、然るべき樣に掟て給へと仰せらるれば、殿承はらせ給ひて、春宮に御對面こそは例の事なれとて、思し掟てさせ給ふ程に、又次の春宮には一の宮をとこそ思召すらめと、中宮の御心の中にも思し掟てさせ給へるに、上おはしまして、東宮の御對面急がせ給ふに、世の人如何なるべい事にかとゆかしう申し思ふに、一の宮の御方樣の人人、若宮斯くて頼もしういみじき御中より光り出でさせ給へる、いと煩はしう、然樣にこそはと思ひ聞えさせたり。又或ひは、いでやなど推し測り聞えさせたり。春宮行啓あり。十一日に渡らせ給ふ程、いみじうめでたし。一條院には、如何におはしまさんとすらんとより外の歎き無きに、春宮方の殿上人など、思ふ事無げなるも、常の事ながら、世の哀れなる事、唯だ時の間にぞ變りける。さて渡らせ給へれば、御簾越しに御對面ありて、有るべき事ども申させ給ふ。世にはおどろ

おどろしう聞えさせつれど、いと爽かに萬づの事聞えさせ給へば、世の人の空言をも爲けるかなと宮は思さるべし。位も讓り聞えさせ侍りぬれば、東宮には若宮をなん物すべう侍る。道理のままならば帥の宮をこそほと思ひ侍れど、はかばかしき後見ども侍らねばなん、大かたの御政にも年頃親しくなど侍りつる男どもに、御用意あるべきものなり。みだり心地癒るまでも本意遂げ侍りなんと爲侍り。また然らぬにても在るべき心地も爲侍らずなど、様様哀れに申させ給ふ。春宮も御目拭はせ給ふべし。さて歸らせ給ひぬ。中宮は若宮の御事定まりぬるを、例の人におはしまさば是非無く嬉しうこそは思召すべきを、上は道理のままにとこそは思しつらめ、彼宮も然りとも然様にこそはあらめと思しつらんに、斯く世の響きに由り引き違へ思し置きつるにこそあらめ。然りともと、御心の中の歎かしう安からぬ事とは是れをこそ思召すらめと、いみじう心苦しういとほし。若宮はまだいと稚くおはしませば、自ら御宿世に任せてありなんものをなど、思召いて、殿の御前にも、猶此事如何で然らでありにしがなとなん思ひ侍る。彼御心の中には年頃思しつらん事の違ふをなんいと心苦しう理無きなど、泣く泣くと云ふばかりに申させ給へば、殿の御前、げにいと有り難き御事にもおはしますかな。又然るべき事なれば、げにと思ひ給ひてなん掟て仕うまつるべきを、上おはしまして、有べい事どもをつぶつぶと仰せらるるに、否、猶惡しう仰せらるる事なり、次第にこそと奏し返すべき事にも侍らず。世の中いとはかなう侍れば、斯くて世に侍る折、然様ならん御有様も見奉り侍りなば、後の世も思ひ無く心安くてこそ侍らめとなん思ひ給ふる、と申させ給へば、又是れも道理の御事なれば、返し聞えさせ給はず。上は御心地の苦しう覺えさせ給ふままにも、宮の御前をまつはしめ聞えさせ給へば、片時立ち去り聞えさせ給はず、いと苦しげにおはします。御讓位六月十三日なり。十四日より御心地重らせ給ふ。若宮、春宮に立たせ給ひぬ。世の人驚くべくもあらず。有べい事と皆思ひたりつれど、御惱の程、一の宮の御前立ち去らず扱ひ聞えさせ給ふも、御心の中推し測られ、心苦しうて、中宮もあいなう御面赤む心地せさせ給ふ。一品の宮も萬づ思し亂れたる御心の中にも、一の宮の御事の斯かるを添へ歎かせ給ふべし。春宮の御事など、すべて宮は何とも覺えさせ給はねば、唯だ殿、かたかたに御暇無く、内、春宮、院などに參り定めさせ給ふ程、えも云はずあさましきまで見えさせ給ひ、御幸ひかなと、めでたく見えさせ給ふ。斯くて院の御惱いと重らせければ、御髪下ろさせ給はんとて、法性寺の座主院源僧都召して仰せらるる事ども、いみじう悲しとも疎かなり。中宮、我にもあらず涙に沈みておはします。一の宮、一品の宮など、いみじう思召したり。春宮の御乳母達の思ひたる氣色、今はしもいとめでたし。斯くて御髪六月十九日辰の刻に下ろし果てさせ給ひて、有らぬ様にておはします。中宮え塞き敢へさせ給はず。思ひ遣り聞えさすべし。然てだに平安におはしまさば、いとめでたき御有様なるべき、いみじき一院にこそはおはしますべきを、すべておはしますべうも見えさせ給はぬこそいみじけれ。此修法など今は止めさせ給ひて、念佛などを聞かばやと宣はすれど、只今は同じやうに、平安におはしますべき御祈りのみぞある。然りとも、いと斯ばかりの御有様を背かせ給ひぬれば、然りともと頼もしうのみ誡も思したるに、五歳にて春宮に立たせ給ひ、七歳にて御位に即かせ給ひて後、二十

五年にぞ成らせ給ひにければ、今の世の帝の斯ばかり長閑かに保たせ給ふやう無し。村上の御事こそは世にめでたき例へにて廿一年おはしましけれ。圓融院の上、世にめでたき御心掟て、類ひ無き聖の帝とさへ申しけるに、十五年ぞおはしましけるに、斯う久しうおはしましつれば、いみじき事に世の人申し思へれど、御心地の猶いみじく重らせ給ひて、寛弘八年六月廿二日の晝つ方、あさましう成らせ給ひぬ。許多の殿上人、上達部、殿ばら、宮の御前、一の宮、一品の宮、すべて聞えん方無し。殿の御前、えも云はずいみじき御心地せさせ給ふとも疎かなり。許多の御修法の壇ども毀ち、僧どもの物運び喧騒る程いと物騒がしう、樣樣に哀れなる事多かり。内方はめでたき事を日の射し出でたる心地したり。此院には萬づ只今はかき曇り、いみじき御有樣どもなるに、春宮のいと若う、行末はるかなる御程思ひ參らするに、いとめでたし。今年は四歳にならせ給ふ。三の宮は三歳におはします。何とも無う紛れさせ給ふも、いみじう哀れなり。いみじき御有樣の又限無きと聞えさすれど、道殊にならせ給ひぬれば、暫しこそあれ、然てのみやはとて、中宮も御方に渡らせ給ひぬ。御裝飾樣殊に爲なして、大殿油近う參りて、然べき人人は遠く退きて侍ふ程などこそは、世に類ひ無くゆゆしきわざなりけれ。中宮、物の哀れも何時かは知らせ給はん、是れこそ初めに思召すらめ。參らせ給ひし程、いみじう若くおはしましに、斯くての後、十二三年に成らせ給ひぬるに、又並び聞えさする人無くて、明暮萬づに慣れ聞えさせ給ひけるに、俄かなるやうなる御有樣を、如何でかは疎かには思召されん。萬づに道理と見えさせ給ふ。一品の宮は十四五ばかりにぞおはしませば、萬づに今は思し果てて、哀れに思召し歎く。帥の宮はまだいと若うおはしませど、大方のどやかに、心耻かしう、萬づ思し知りたる御有樣なれば、いたう沈み思し歎く樣、道理なりと見えたり。一方のみならず、自ら思し結ぼほるる事無きにしもあらじかしと、樣樣心苦しうなん。斯くて日頃の御讀經の聲哀れにて過ぐさせ給ふ程に、御葬送は七月八日と定めさせ給へり。いみじう暑き程に、心より外に程經させ給ふを、中宮いみじう思召したり。斯くておはしますこそはめでたき事ながら、自ら限り有るわざなれば、哀れにのみなん。七月七日、明日は御葬送とて、按察大納言殿より、

七夕を過ぎにし君と思ひせば今日はうれしき秋にぞ有らまし

右京の命婦返し、

わびつつも在りつるものを七夕の唯だおもひやれ明日いかにせん

斯くて八日の夕、岩蔭と云ふ所へおはします。儀式有樣珍らかなるまで裝ほしきに、然は是れこそは最後の御有樣なりけれと見ゆるが、悲しきものに人思へり。殿の御前を初め奉りて、何れの上達部、殿上人かは殘り仕うまつらぬは有らん。おはしまし着きては、いみじき御有樣と申しつれど、はかなき雲霧と成らせ給ひぬるは、如何が哀れならぬ。永き夜と云へど、はかなう明けぬれば、曉方には御骨など、帥の宮、殿など取らせ給ひて、事果てぬれば、大藏卿正光朝臣負ひ奉りて還らせ給ふ程など、いみじう悲し。還らせ給ふ道の心も無し。皆一條院に夜深く入らせ給ひぬ。高松の中將、

いづこにか君をば置きて歸りけんそこはかとだに思ほえぬかな

公信の內藏頭、

かへりてもおなじ山路を尋ねつつ似たる煙や立つとこそ見め

哀れに盡きせぬ御事どもなり。日頃は然ても、おはします御方の儀式有樣、はかなき御調度より初め、例樣にもてなし聞えさせ給へれば、然てのみ有りつるを、今日よりはおはしましし所を、御念佛の所にしつらひて、佛おはしまさせ、僧などの慣れ姿も、いみじうかたじけなう、萬づに悲し。御念佛の聲の、日の暮るる程、後夜などのいみじう哀れに、樣樣悲しき事多くて過くさせ給ふに、御前の瞿麥を人の折りて持て參りたるを、宮の御前の御硯瓶に挿させ給へるを、春宮取り散らさせ給へば、宮の御前、

見るままに露ぞこぼるる後れにし心も知らぬなでしこのはな

月のいみじう明きに、おはしましし所の、氣鮮かに見ゆれば、宮の御前、

影だにも留まらざりける雲のうへを玉の臺と誰れか云ひけん

はかなう御忌も過ぎて、御法事一條院にて爲させ給ふ。其程の御有樣更なる事なれば書き續けず。宮宮の御有樣いみじう哀れなり。御忌果てて、宮は枇杷殿へ渡らせ給ひたり。藤式部、

在りし世は夢と見なして涙さへとまらぬ宿ぞ悲しかりける

一品の宮は三條院に渡らせ給ひぬ。一の宮は別納におはします。中宮より、宮宮に覺束なからず音づれ聞えさせ給ふ。九月ばかりに辨の資業、一品の宮に參りて、山寺に一日まかりたりしに、岩蔭のおはしまし所見參らせしかば哀れに思ひ給へられて、

岩かげの烟を霧に分きかねて其ゆふぐれの心地せしかな

一條院の御念佛、御讀經、御果てまで斯くてあるべし。御忌の程、同じ如侍はせ給ひしに、故關白殿の僧都の君は退かで給ひて、飯室はやがて其儘に侍ひ給へば、僧都の君の御許に遣りし、

くりかへし悲しきことは君まさぬ宿の宿守る身にこそありけれ

僧都の君の御返し、

君在さぬ宿に住むらん人よりも外の袂は乾くまも無し

春宮は今は內におはしませば、中宮の萬づに思し亂れさせ給ふに、春宮の御有樣の覺束なささへ添ひて、惱せく思召さるる事多かり。內にはまだ誰も誰も侍はせ給はず、尙侍の殿をぞ參らせ給へとある御消息度度になりぬれど、殿の御前、すがすがしうも思し立たせ給はず。內の御後見も殿仕うまつらせ給ふ。春宮のはた更なり。猶珍らかなる御有樣を、同じ事のやうなれど、盡きせず世人申し思へり。內の宣耀殿の宮達は、三所は御冠せさせ給へり。四の宮ぞまだ童にておはします。女一の宮、齋宮に居させ給ふべき御定めになりぬ。御即位、御禊、大嘗會など樣樣に喧騷る。女御代には尙侍の殿出で給ふべきやうにぞ世人申しける。然れど其れはまだ定めも無し。斯く云ふ程に、故帥殿の姫君には高松殿の二位中將住み給ひければ、此頃ぞ

御子産み奉り給ひければ、いみじう美くしき女君におはすれば、殿は后がねと抱き持ちて愛くしみ奉り給ふ。七日が程の御有樣限り無く、御方方よりも御訪問どもあり。殿の御前はた更なり、萬づに知り扱ひ聞えさせ給ふ。あはれ帥殿のいみじきものにかしづき給ひしを思し出づるにも、是れ悪ろき振舞にはあらねど、世に限無き御有樣に思し掟てしものをと、先づ思ひ出で聞ゆる人人多かり。詳しき御事も世の騒かしき營みなれば、え書き盡さずなりぬ。推し測るべし。此君生れ給ひて後は、殿、内などに參り給ふも、暇惜しう思されてなん。尙侍の殿、内に參らせ給ふ。此度はいと心殊なり。帝の御心いとをかしう今めかしう、臈臈しうおはします。何事も物の榮ある樣におはしませば、萬づもてはやし思召したり。御禊などいみじかべう云ひ喧騒るめり。此頃は、齋宮も野の宮におはします程いとめでたながら、宣耀殿の明暮の御中らひの俄に引き離れさせ給ふも、御涙こぼれさせ給へど、忌忌しければ忍びさせ給ふべし。殿は御服疾う脱がせ給ひて、御禊などの事ども執り行はせ給ふ。東宮の宮司などまだ定まらず。御忌の程などはいとゆゆしく思され給ふ。又日次など撰らせ給ふ程に、事しも又一定なれば此頃ぞ脱がせ給ふ。はかなくて十月にもなりぬれば、中宮の御袖の時雨も眺めがちにぞ過ぐさせ給ふ。御行のみぞ隙無き。庭も紅深く御覽じ遣られて哀れなり。兒宮のいみじう慌てさせ給ふ程の愛くしきにも、東宮のいといみじう成長させ給ふ程を人傳てに聞し召しても、飽かぬ樣に思し召さる。大方の御有樣こそ長閑かにも思召せど、猶行末盡きずまじき御頼もしさを、許多の御中に女宮の交らせ給へらましかば如何にめでたき御かしづきぐさならましと、おはしまさぬを口惜しき事に見奉り思召すも、餘りなるまでである御心なりかし。承香殿、弘徽殿などの、女宮をだに持ち奉らせ給はましかばと哀れなり。世の中には、御禊など嚴めしき事ども樣樣搖すれど、中宮は唯だ哀れ盡きせず思召されて、然るべき折折は一品の宮に御消息聞えさせ給ひ、何事も心ざし聞えさせ給ふ。一品の宮も月日の過ぐるを哀れに悪しき事に思召しては、帥の宮だに一所におはしまさぬ事をぞ口惜しく思召す。何處にも唯だ御行をぞ怠ませ給はぬ。一條院には、御讀經、御念佛など絶えずして、僧どもの哀れに心細く賢き所に、人少なに覺ゆるままに、世は斯うこそは有りけれと、おはしまし世の御有樣を語りつつも、思ひ出で聞えさせぬ折無し。帥の宮は、故院の一條院におはしましし折にこそ、別納の御住居もつきづきしかりしか。今は何事も隔て多かる御心地せさせ給へば、如何にと思し亂るるに、殿おはしまして、南の院を奉らせ給ひて、別納をば三の宮の御領にと思召したり。悪しかるまじき事なれば、然樣に思召したれど、猶御果てまでは斯うてやとぞ思召しける。年頃の女房達、内に參るは少なうて、春宮、中宮、一品の宮、帥の宮にぞ皆分かれ分かれ參りける。故院の御心掟てのやうには誰も誰もおはしまさじとて、唯だ其御筋に尋ね參るなるべし。哀れに盡きせずめでたうおはしましつる帝と惜み申さぬ人無し。彼藏部屋、弘徽殿、承香殿は、皆御服あるべし。如何でかは然あらざらん、哀れなる御形見の衣は所分かずなん。其が中に承香殿は忠實やかに思ひ聞え給へりしものを、如何でか思し知らぬやうはと見えたり。一條院の御處分無くて亡せさせ給ひにしかば、後に殿の御前ぞ爲させ給ひける。彼弘徽殿、承香殿など、皆此中にて分ち奉らせ給へり。其程の御心萬づ尋常ならずなん。哀れ

なる御心向けを何れも世は斯うこそはと申すながらも、可惜しうめでたき御有樣を、いとどしうのみなん。一條院御髮トろさせ給はんとて、宮に聞えさせ給ひける。

露のみの假りの宿りに君を置きて家を出でぬる事ぞかなしき

とこそは聞えしか。御返し、何事も思し分かざりける程にてとぞ。左衞門督の北の方、內の大臣殿の女御に、

數ならぬ
道芝とのみ歎きつつ、
あけくれ竹の生ひ行かん
嬉しき節や見ゆるとて、
高き梢に巢籠れる
梅の匂ひに誘はせて、
谷の氷も打解けて
下枝までにも打靡き、
匂ひに通ふ紫の
はかなく露の起き臥しに、
此世の末になりてだに、
いつしかとこそ松山の
まだ木傳はぬ鶯を
東風早く吹きぬれば、
霞の衣立ち居つつ、
岸の藤なみ淺からぬ
雲のたなびく朝夕に、
心を掛けて過ぐす間に、
山ほととぎす小夜深く
何の心を思ふとも
長き例に引きなして、
蓬の宿を打拂ひ
現せ身の世のはかなさも
君が禊を祈りてぞ
傍へ涼しき風の音に
花の袂のゆかしさを
紅葉の錦、霧絶えず、
久しき事を菊の花、
天の下降る甲斐やあると、
心もとなく思ふ間に、
打拂ひつつ在り經んと
衣の裾に育みて、
今も綠の松にのみ
夏來ぬべしと聞ゆなる
語らひ渡る聲聞けば、
云ひやらぬ間の菖蒲草
屋端に懸かる物とのみ
玉の簾と思ひつつ、
忘れ果てては、千年經ん
かき流しやる河瀨にも、
驚かれても、いろいろの
秋深くのみ賴まれて、
世を長月と云ひ置ける
匂ひを染むる時雨にも
はかなく過ぐす月日にも
瞿の霜の置けるをも
思ひ空しく爲さじとぞ

塵も据ゑじと磨きつる　玉の光の思はずに
消えにしよりは、かき昏す　心の闇に惑はれて、
飽くべき方も涙のみ　盡きせぬものと流れつつ
戀しき影も留まらず、　袖のしがらみ堰きかねて
麗の聲だに惜まれず、　惑ひ入りては尋ぬれど
死出の山なる別れ路は　行きて見るべき方も無し。
哀れ忘れぬ名殘には　日數ばかりを數ふとて、
啼きわたるめる呼子鳥、　ほいかに君を歎くなる
聲ばかりにて、山城の　とはに岩瀬の森過ぎて、
我ばかりのみ住の江の　先づ行き方も波掛くる
岸のまにまに忘れ草　生ひも繁らんと思ふにも、」
軒に掛れる蜘蛛の　皆がら斷えぬ便だに
結ばざりけん絲弱み　心細さぞ盡きもせぬ。
むなしき空を思ひ佗び　雁の群れ居し跡見れば
獨り常世に起き臥しも　枕の下に生けらじと、

憂き身を歎く鴛鴦の　つがひ離れて夜もすがら
上毛の霜を拂ひ佗び　凍る垂氷に閉ぢられて、
來し方知らず啼く聲は　夢かとのみぞ驚きて、
消えかへりぬる魂は　行方も知らず憧れつつ、」
釣りに年經る漁人も、　舟流したる年月も、
甲斐無き方は增さるとも、　刈る藻かき道り求むとも、
海松海布なぎさに打つ浪の　跡だに見えず消えなんと、」
思ひの外に津の國の　暫しばかりも長らへば、
何はの事も今は唯だ　あまた搔き積む藻鹽草
鹽の誰をか賴むべき。　煙斷えせぬ薰香の
この形見なる思ひあらば、　一人殘らず打羽ぶき
衣の裾に育めと、　身の程知らず賴むめるかな。」
水ぐきに思ふ心を何事もえも書き敢へぬ涙なりけり
內大臣殿の女御殿の御返し、
水ぐきの跡を見るにもいとどしく流るるものは涙なりけり

古を
思ひ出づれば、雪消えぬ
生ひ出でん事ぞ難かりし。
枯れわたりたる水際に
ふたりの羽の下にだに
雪の中にぞ漂ひし。
夜は舊巣に歸りつつ
あまたの聲と聞くばかり、
生ける甲斐無き身なれども、
互にこそは頼みしか。
行末遠き小松原
その蔭にこそ隱れめと
幾入とだに思ほえず
色も變らで年經れば、
嬉しき節を見る毎に、
垣根の草は二葉にて、
角ぐむ蘆のはかなくて
つがはぬ鴛鴦は寂しくて、」
狹く集ひし鳥の子の
晝はおのおの飛び別れ
翼を戀ひて啼き佗びし
悲しき事は廣澤の
浪の立ち居に附けつつも
誰も我世の若ければ
木高くならん枝もあらば
思ふ心は紅緑、
思ひ初めてし衣手の
生ひ出づる竹の己が世世
如何なる世にか枯れぜんと

思ひけるこそはかなけれ。
磨きし程に消えにけり。
悲しき琴を調べつつ、
群れたる中に唯だひとり
知る人も無く惑ふらん。
戀し悲しと思へども、
雲ばかりをぞ形見には
木の下闇に惑ふめる
拂はん方も思ほえぬ。
涙の川を流すかな。
如何ばかりかは湛ふらん、
心の程を思ひやる
朝の露を玉と見て
夕の松の風の音に
音をのみぞ啼く群鳥の
如何なる方に飛び行きて、」
留まる類ひは多くして
今は空しき大空の
明暮に見る月影の
歎きの森の繁さをぞ
見る人毎に道理の
かしてや其處の邊りには
淵瀬も知らず歎くなる
人の上さへ歎かるるかな。

とて、また斯くなん、
君も然ばむかしの人と思はなん我もかたみに頼むべきかな

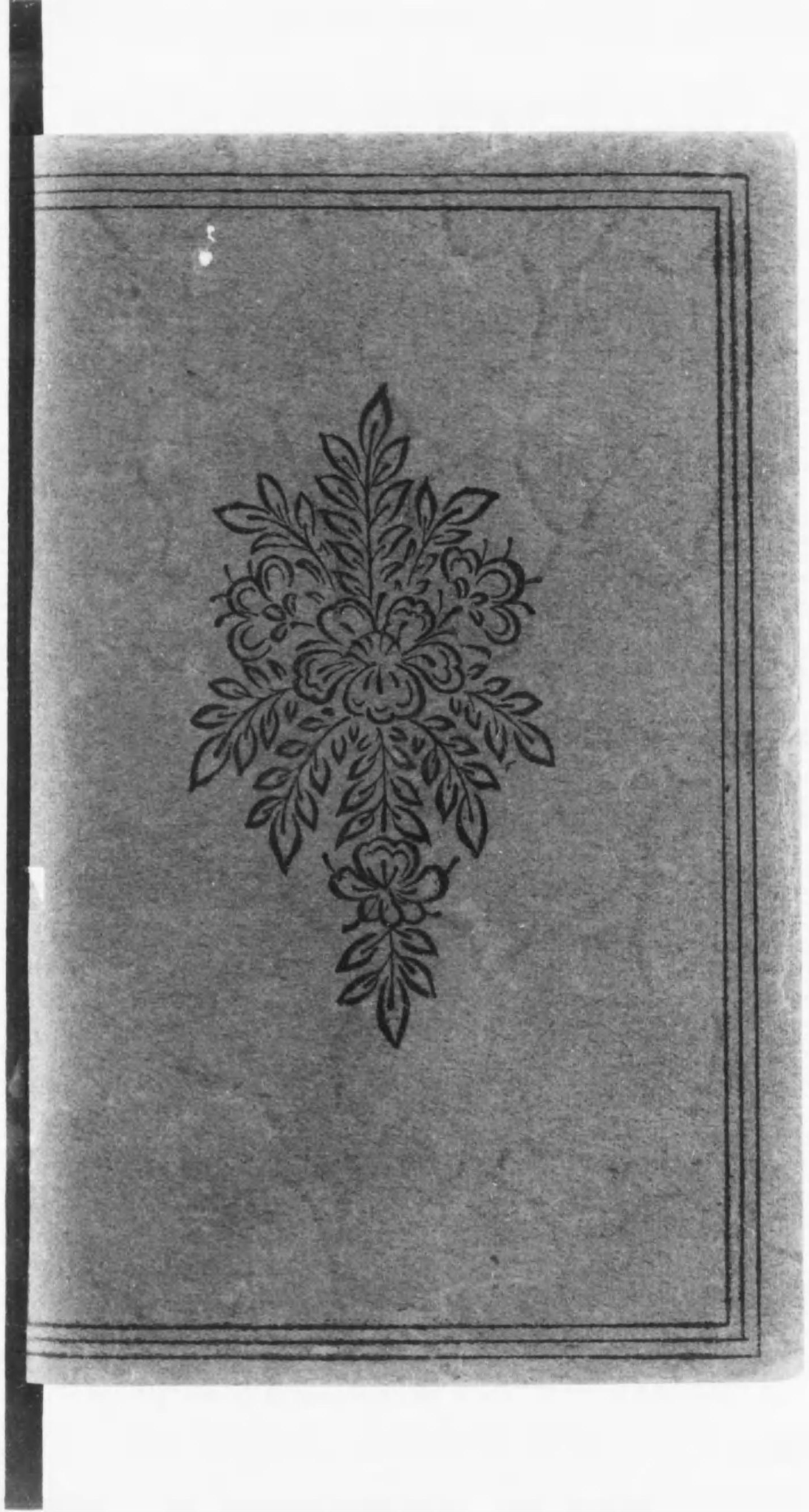
榮華物語上卷 終

昭和二年十二月二十日印刷
昭和三年十一月二十五日發行

〔非賣品〕

日本古典全集第一回
榮華物語 上卷

編纂者 與謝野寛
同 正宗敦夫
同 與謝野晶子
裝幀圖案者 廣川松五郎
東京府北豐島郡長崎町一六二
發行者 長島豐太郎
東京府北豐島郡長崎町一六二
印刷所 新樹製版印刷所
印刷者 高瀨清吉
(荒井印刷所印刷)

發行所 東京府北豐島郡長崎町一六二
日本古典全集刊行會
振替口座東京七三〇三二
電話番號大塚二〇九六

終